

中国佛敎研究法私見

——特に初歩の学生諸君のために——

横 超 慧 日

—

学年末で学生諸君の努力された幾多の卒業論文を読み、いろいろ考えさせられる所があつた。この機会に佛敎学の在り方について、平素から感じていたことと併せて覚え書き程度のを二三書きとめてみたいと思う。高いレベルを対象とはではなく、これから卒業論文や修士論文を書こうという人々への初歩的な手引きという程のものである。

先ず論題の選択についてである。多くの場合大学で聴講し学習した講義題目に関連するものが選ばれるが、それは基礎知識が用意されている便宜からいって尤もなことである。しかし講義は敎授が研究した成果に基いた授業であつて、そこに到達するまでの経過や出発点まで知らされるとは限らない。従つて講義内容から直ちに自分もそれについて調べてみたいと思いついた時には、その研究が自分にとってどんな意味を持つかを先ず自分なりに考えてみなければなるまい。もちろん研究に着手する前に考えていた意義と、努力して研究に一往の成果を収めた段階で見出された意義とは、必ずしも完全に同じであるとは云えない。それは当然のことであるが、それにしても当初は是非とも

このことを徹底的に調べてみたいという意欲がなければ努力の持続は望めないのであるから、そうした意欲の根源として研究意義の確認だけは絶対不可欠である。若しもそうでなかったならば、徒らに知識の蓄積羅列に止まって、論文はたとひ長篇になつても自分の心を養う糧とはならないであらう。

論題の選択が自分に關係ある宗派の祖師の著作及び教義というような観点からなされることもある。そういう場合などは、今までは教団による帰属關係が主となつての祖師であつたのに対して、今や自分自身が直接祖師の精神に触れようというのであるから、それは自己に忠実な態度といえる。しかしこの場合も、いやしくも研究である以上、最初から祖師の教説に無批判に従うというのではなく、どうしてそうならねばならぬのか、それ以外にも種々の考え方が予想されるがその中でどうしてそこへ帰着しなければならなかつたのか、そこにはどのような要因があつたであらうかなどと、そうしたもろもろの問題設定が必須である。

さて次に愈々研究にとりかかろうとする時、準備としてその研究のための基本的文献の整備と、参考書の用意と、研究論文のリスト作成とが必要になる。基本的文献は精読し緻密に考察する便宜上、漢籍の場合は成るべく大字の単行刊本を具えるがよい。論文に引用する際には、普及率や校訂の正確さ等の理由で大正大藏經本が用いられその中の巻数頁数等が記入されるのが通例であるが、自分で研究する際には携帯の便からいっても注意力集中の利点からいってもやはり単行本を用意したい。そして註釈書と合せたいわゆる会本（えほん）になっているようなものがあるならば、会本を入手すべきはもちろんである。佛教大系のように重要佛典について代表的注釈を一括して会本にしたものがある。だからそこへ入っているようなものを研究しようとする人ならば、それを用いることがどんなに助けとなるか多言を要しない。だが註釈書があるからと言って、注釈書や会本だけでは十分でない。やはりもとの基本文献は、会本になつていないものでも一部用意できたならば大いにそれなりの利点がある。例えば、聖徳太子の勝鬘經義疏を

研究しようと決めたとする。その場合には勝鬘經と太子の義疏とを一部にした会本があるのでそれを入手するのが第一歩であるが、それと同時に、勝鬘經だけで一部となっている単行本も手許におきたい。それによって義疏をはなれて經だけを通読することは、全体を総合的に理解するために目に見えぬ効果があり、自分の考えをまとめる上にどんなに有利であるか、それは実際にその場に當って知られることである。又例えば嘉祥大師の法華玄論の研究を初めるとする。法華玄論は注釈書ではないが法華經に関する諸問題を論じたものであるから、法華經だけの単行本を別に用意しておいたならば問題が複雑化してきた時その整理に戸惑う難を免れるであろう。

次に参考書については、佛書解説大辞典だとか佛教大辞典だとか或いは又国訳一切經の解題の項などによって、自分のいま研究にかかろうとする書物なり問題なり人物なり事項なりにつき、古來どのような研究がなされてきたか現存する資料にはどのようなものがあるかを知ることができる。そしてそれらの多くの資料の中で第一に依るべきものとそうでないものとの判別が必要となる。又時代により学系により研究態度に特色があるから、その点も十分心得てから着手すべきで、そうしたことは教授や先輩などに相談しなければ初歩の人が自分で判断するのは困難である。

或る問題、殊に教義上の主要項目を調べようとするならば、たいてい各宗でそれぞれの立場から論述した綱要書があるから、予めそれについての鳥瞰しておくがよい。地論宗の淨影慧遠の大乗義章、三論宗の嘉祥大師吉蔵の大乗玄論、天台宗の天台大師智顛の法華玄義の中の迹門十妙・本門十妙、法相宗の慈恩大師窺基の大乘法苑義林章、華嚴宗の賢首大師法蔵の華嚴五教章など、それらのものは何れも初心者も簡単に読解できるようなものではないけれども、それらの中でどんな事項が論述されているかという項目だけでも調査しておくことが望ましい。これによって教義上のどの一つをとってみても、そこに佛教学全体に通ずる重要性和それに対する各宗独自の見解がうかがわれるからである。淨土教関係の中で、道綽の安樂集とか懷感の群疑論とか源信の往生要集とかいうような書物も、見方

によつては問題別の要義集と見ることもできるであらう。後世、天台宗には天台宗学の論義を類聚した台宗二百題などという本ができ、浄土真宗でも慧空の叢林集の如きがあり、同様の性質のものは他にも少なくない。但し余り早くからこうした論題集のものに深入りするのは考えもので、初めは先ず簡潔なところから根本要義の大綱を把握することに努めるべきである。教義の組織体系に相当の理解が得られた後でない、と、繁瑣な論義に目がくらみ肝心の帰趣を見失つてしまふ危険があるからである。

佛教学が他の諸学に比し甚だ立ちおくられているのは、科学的な工具使用の不備による点も大きいといふので、最近では索引の作成がしきりにすすめられている。大々的に計画されて大規模な仕事がつづけられているところの大正大藏經の索引はその最も代表的なもので、その他にも高僧伝索引だとか親鸞聖人著述用語索引といふようなものがある。これらが学界へ提供せられるようになったので、学者は著しく便益を得られることになった。しかし歴史的な事実関係や限られた範囲の用語のみについてはそれでよいとしても、尨大な思想文献の中からいくつかの短い単語の所在をつきとめるというだけでは、それが直ちに思想史研究に役立つものといふことはできない。従つて索引を十分に使いこなすことができるためには、全体に関するかなり深い理解が前提条件となる。そして何よりも索引を必要とする研究構想ができていなければ役に立たない。索引とかメモといふものはすべてそういうものであるが、個々の佛典に対して古人が作つておいたメモの中には今日尚我々が利用する上に甚だ便利なものも少なくない。例えば、大智度論類聚標目（日本大藏經所収）というのがある。これは智度論の中に出てくる教義・名数・譬喩等を項目毎に分類したメモであつて、百巻もある大部なこの論から必要事項を検索するのに索引以上に都合がよい。又そのように分類したものでなくても、長篇の文献の中から順次巻を追つて要点を摘記したメモが作られるということも屢々試みられた。例えば天台三大部補註条箇といふような種類のものがそれである。その他年表や地図を座右におき、着実に時代的前後関係や歴史地理的な交渉等が念頭におかれねばならぬのであるが、そうした配慮は今あらためてここに説くまでもな

いので省略する。

次に研究論文のリスト作成、これも大切な任務である。近代に入って以後の学問は著しく進歩したといっても、はたして確実に先人の業績の上へ積みかさねられていつているかどうかということになると、必ずしもそうとは云えない。自然科学の領域では新しい成果は古い業績を越えて一日一日進んでゆくが、宗教関係のものに至っては領解の浅深、推考の多面ということがあり更に表現を越えたものへの直観があつて、後の人が誰でも先の論文を遺漏なく評価できるというものではない。従つて古い業績が案外に見落されている例が少なくないのである。佛教学関係或は東洋学関係、宗教学・哲学関係等の論文目録を丹念に調べなければならぬ。もちろん雑誌だけでなく著書や記念論文集などを渉獵すべきは云うまでもない。最近は講座の形式による平明な解説書も多く出ているが、研究者としてはそれを手引にすることはあつても余りにそれに拘束されてはいけない。自分で自由に考える訓練が大切である。余りに一人の人の著書の説だけに左右されてそれだけに終つたならば、切角の研究がそこで停止し前進を見ぬことになりかねないのである。学問は多くの見解に触れそれらの間に自主的な批判を下してゆく所に初めて力が養われ自己の中に消化され攝取されてゆくものだからである。

二

準備が整つたところで愈々ゆっくり腰を落ちつけて資料の読解にとりかかることになる。論文としての成果執筆というはつきりした予定のもとに読解すれば、注意力がはたらいて平素殆んど意にとめずに読み過ぎしていたような部分にもしきりに心惹かれるようになる。それであれもこれもと疑義が湧いてくる。疑義が湧いてきたならば、そこで初めて本当の意味での研究が緒につき初めたと云つてよいのであるから、その段階で挫折せぬよう一気に全力を集中

することが大事である。夜分就寝してもその疑義が脳裏を去らずなかなか眠につけぬことがあるが、私はそのような時こそ進歩が確実に身につけてきた段階だと思ふ。かような時期は研究者なら誰でも経験するところで、古来高僧の著作に関し神僧が夢中に現われて指導した所だなどといわれるのは、結局こゝうした体験の神秘的表現に外ならない。学究者の眞の喜びというものは実はこの中にあるのであつて、それは研究成果となつた論文を世に問う時の胸中とはおのづから又別なものであると言えよう。

研究が進んで高い思想の核心がほぼ捕捉できたように考えられた時、その特異性を前後や同時の諸説と比較して、そこに発展の系列を認めようとする期待がおこる。もちろん一人の人の最後の段階にそれが位置すると思われたならば、その人の生涯の各段階を発展の過程に序列づけることが試みられる。しかしそのような序列づけでその研究は完了したことになるかどうか。私は何よりも古賢の到達した思想信仰というものは、その人が満足できぬ自己に向つて必死の問いかけをしてきた結実というべきものであると思うから、若し傍觀的評論家的な視点を離れられぬ限り、眞にその生きた信仰・生きた思想に向つて自分が肉迫することにはならぬと考える。もちろん時代の相違により教養も感覺も違ふわれわれが古人の心情そのまま再体験できるはずはないのであるが、それにしても些かでも眞に近づきたいと望むならば私自身がその時代に身をおいて考えねばなるまい。若しも自分がその人と同じ境遇にあり同じ教育を受けて同じ時代の苦悶を味つていたとするならば、どんな道を歩んだことだろうかと仮定して、眞剣に考えられる限りの最高の道を探つてみるがよい。その場合その古人の経歴の中で、求道の道程としてたどり得られるものがあつたならば、それこそ最要の鍵である。抽象的に言っているだけでは理解されぬであろうから、ここに一例を挙げることにしよう。

天台智顛は円融三諦説を信じ、そのの根拠を一心三觀の觀法に在りとする。そして法華經こそ円頓円融の根元であり、次第三觀は大品經や華嚴經等から導かれるものと見ていたようである。そこで智顛は法華を以て円教の純粹なも

のとすが、法華經の中でどこにそのような論理が説かれているであろうか。これは決して智顛の著作中から直截簡明に導き出せるものではないのであるから、どうしても智顛の求道過程を追って追体験してゆくよりほかに道はない。そこで智顛の伝記を調べてみると、古来注意されてきたように、大蘇開悟と華頂降魔の二件が彼の思想形成に決定的機縁をなしていると云われている。そこでその大蘇山で師の南岳慧思から法華三昧の前方便となる体験的行法を指導せられたというのであるから、それがどのようなものであったか自分自身^がその場におかれていたものとし智顛の身になって考えてみたらどうか。智顛はこの時法華經の読み方において文字理論を越えたものを読みとった。そのことを見落したならば、天台智顛の円融思想は終にその由って来る所を捕えることができないで終るであろう。後の華頂降魔即ち天台山華頂峰についての独坐思惟が大悟となったのも、前の大蘇開悟が師の指示による求道の真のあり方に対する開眼であったのに対して、今度はその自己一身の胸奥にひらめきとして体験されたものと私は思う。私はそれが法華円頓と称される根源につき経説の中に拠る所を感じせぬのではないが、今それをここに叙述することは控える。いづれにもせよ天台の教説を彼の得悟過程に対する省察をしないで論ずることは、たといその生涯における思想の段階序列を想定し得たとしても、真に天台の学を学んだということにはなるまい。

以上は智顛に例をとって佛教学上得悟過程のいかに重大であるかを述べた。同様のことは何人の上にもあるはずである。古賢が真の宗教家であって単なる文字知識の学者に止まるものでない限り、記録の残存と否とは別として、必ず何人にも苦悶の求道があったに相違ない。そしてその上での開悟があったのである。われわれはそれを歴史上の一人の古人の問題とせず、道の普遍性とそれを求める求め方もまた不変の道であることを信知することによって、古賢を学ぶことが自己自身の生命につながることを知らねばならぬと思う。

中国や日本において古人がその信仰を確立するに至った経路について、それに関する伝記上の明確な記録がない場

合、それを補うものとして著作の先後を調べる方法と引用されている経論疏等を調べる方法とが考えられる。この中で著作の先後に關しては、前に著した自己の著作を後のものの中に言及している場合とか、著者の居住地移動に應じてそれが叙述の中に示されている場合とか、自ら前説を訂正又は補足したことを記述している場合とか、或は明かに晩年の著作と知られるものに明記されながらそれが他の著作に見られぬ場合とか、その他種々の場合があつて、それらの比較によつて著作の先後が推定される。近來このようにして或る人の生涯の中で著作の先後を論ずることにより、その人が一生の間に学説なり思想なりにおいて進歩發展があつたことを明かにしようとする努力が多くの人によつてなされるようになってきた。これはまことに結構なことである。しかしその結果が、これこれの説はその人の晩年に成立したもので若い時の著書には見られぬなどとして、それを分類し順序をつけるだけに終ることも往々にして見られる傾向である。切角の調査によつてそのような分類なり段階別が試みられたとしたならば、更に一步を進めてそのような進歩發展がどんな事情の下に進められたのかという背景の究明にまで及びたいものである。前期になつた説が後期に見られるとするならば、それが後期になつて顯著になるためにはその人の脳裏にあつてどのような考え方がそれを促進させたものか、又前期にはそれが明言せられぬまでもすでにその方向への芽生えを感じさせるものが全くなかつたかどうか、又その新しい学説主張の發揮はその人の信仰の中でどんな意義を持つかなど、研究はそこまで溯らねば完成するとはいえない。こうしたことは深い思索となつて自分がその人の心の悩みを共に悩むほどの努力を経た後でなければ到達できぬのであるから、もちろん初心の人に期待するのは無理かと思うが、その道筋だけは心得ていてほしいと思うことである。

次に引用されている経論疏等の調査を通して信仰確立の基盤を探る方法もよく注意されるところである。例えば経疏にせよ単独の著作にせよ誰かのある著書の中に多くの経論や先人の著作等が引用せられている場合、それを子細に

調査してその引用回数を統計的に表示するのである。古人も經論等を引用する以上は、その文が自己の所信の基礎となつてゐるとか自説を立証するものであるとかいうようにともかくも他者への説得力を持つものという見地に立つての引用に相違ないから、その引用頻度を示すのは確かに有意義な方法といえる。しかしこの方法も頻度数の多少が直ちに依存度を示すものとはいへぬことを忘れてはならぬ。確かに頻繁な引用は依存なくしてはあり得ぬが、個々の場合についてその文の引用がその所説にどれだけの重要さを持つてゐるかを實地に當つて調べてみなければ、一律にみな同程度の扱いで論ずるのは適當でない。時には単に用例を示すというに止まることもあろう。傍証の意味で多く列挙する場合もあろう。信仰などの根本に関わる場合もあるであらうが、現実的な事項の解説に過ぎぬこともあり得る。従つて個々の場合に當つて引用の趣旨を説いたその前後の叙述を注意深く考察し、内面的な意義の把握に努めねばならぬ。大体中国の学者は、伝わつてきた經論を順次必要に応じて参照するけれども、余りに密接な關係にある經論や余りに普及して周知の所となつてゐる經論などは、却つてその名を出さない場合もあることを知つてほしい。例えば、三論宗の吉藏は法華論の疏を作つてゐるだけでなく、他の自著の中にも法華論をしばしば引いて自説に対する有力な保証とする。これに対して法相宗の窺基は吉藏ほど法華論の名を挙げて引用することはせぬ。だがそれだからと言つて、窺基が法華論を軽視したことにはならぬ。むしろ唯識法相宗が世親作の法華論を重視するのは当然であるのに対し、中觀系の三論宗が世親の法華論を引くのはその内面において地論宗や撰論宗などの世親系に対抗する意図を含んでいなかったとは言えなからう。況んや多くの大乘經典になると、その本旨がどこにあるかは見方によつて必ずしも一致せず、更に涅槃經の如き一乗家にとつても三乗家にとつても有利な証文となるものが随處に見出されたとすれば、問題は頻度の如きことでなく經典に臨む基本的態度の確認が先決となる。

かようなわけであるから、私は中国佛教を研究する人々に向つて、初は先ず中国の積家の指示を通さず直接漢訳の經文を精読し、自分なりにその中の要義の本末を予め心得ておくことが先決条件だと勧めることにしている。どう

かすると、經文を読まないで初から經疏の研究や經の総論玄談の読解を始める学生諸君に接することがあるが、それは本末顛倒だ。そのようなことでは經文に対する古賢の讀みの深さとか特色などというものが捕捉できるはずがない。殊に古人は、一つの經を学ぼうとする時、内容的に関連ある主要な諸大乘經を参照して綜合的観点から佛教思想の体系組織を見つけようとし、且つその時々々の主要な論をも釈義のために出来る限り参酌するよう努力していたのであるから、それら周辺の重要經論への顧慮なくして一經の玄義や注釈書に体当りしたところで、全く手のつけようがなく茫然とするのみに落ちつく。それは当然のことであろう。

私は常々感じていることであるが、曇鸞にして般若・維摩・法華の諸經に対する深い省察を若し欠いていたならば、あの淨土論注のような他力信仰がおこり得たであろうか。また善導は涅槃經の注釈を作らずその引用も決して目立つほどには見受けられないが、若し闡提の成佛・不成佛を説く涅槃經の中に自己の佛道を見出そうとする苦悶の體驗を通すことがなかったならば、あの五部九卷に見られるような逆誘撰取の信仰にたどりつくことができたであろうか。親鸞にしてもそうである。確かに親鸞は無量壽經の中に佛の眞実の教を見出したが、そこへ彼を導いたものが天台宗正依の經である法華經でなかったとどうして断定できよう。天台宗への反発から天台正依の經の法華經にも親鸞が反発していたと見るならば、それは偏見の巢窟に陥っているのである。このようなことを考えてくると、天台にせよ、曇鸞・善導にせよ、親鸞にせよ、その著述を通して彼等の信念を文面的に知ることは一往できるであろうけれども、その胸奥に少しでも近づこうとするためには、どうしても我々自身が彼等の修道の歷程に身をおいて考えてみなければならぬ。さもなければついには傍觀者的な知解の域に終始し佛敎学が自己の求道と結びつく緒は断たれるであろう。ここに今述べたようなことは、もちろん、卒業論文などに手をつけようとする初学の諸君にそのまますぐ要求できる問題とは思わぬけれども、今この機会に言及して平素の私見の一端を訴えたいと思ったことである。